



つぼを埋設した墓と考えられる穴について説明を受ける参加者ら—永明中学校校庭遺跡の発掘現場

永明中学校
校庭遺跡

発掘調査の現地説明会

石で囲った穴「墓か」

茅野市教育委員会は28日、永明中学校新校舎と周辺施設の建設に伴い同市塚原で行っている「永明中学校校庭遺跡」の発掘調査の現地説明会を開いた。昨年10月から社会体育館建設予定地で実施している調査の成果を報告。同市内を中心に大勢の住民が参加し、弥生時代後期の住居址や墓と考えられる穴などの説明を受けて理解を深めた。

同遺跡は1970年、永明中学校旧校庭を拡張する工事で見えられた。2021年度は新校舎建設予定地の約6000平方メートルを対象に発掘調査を行い、弥生時代と平安時代の住居址などを発見。昨年10月からは遺跡全体の西側に位置する約1500平方メートルで行い、これまでに住居址のほか、墓と考えられる完形の土器（つぼ、かめ）を埋設した弥生時代の穴4カ所、石で周囲を長方形に囲った穴1カ所が確認された。

説明会は、同市教委文化財課の堀川洗太郎さんが案内した。今回、計5カ所の墓と考えられる穴が発見され、調査区の北側に集中していることから「この辺りは墓域だったと思われる」と説明。石で長方形に囲った穴は「一番の謎。弥生時代後期に他に類例がない」とした上で、石は木棺を囲うように置かれたと思われる穴の中から副葬品とみられる金属製品が出土したことから、「おそらくお墓ではないかと考えている」と解説した。

午前と午後の2回開き、午前の部には約60人が参加。同市塚原の実家に帰省中の東城直子さん(78)＝東京都＝は「弥生時代から集落があり、すぐ近くに墓もあったとは驚いた」と話していた。

(宮沢知史)